

Hospital for Special Surgery 留学記（1年目） 吉原裕之

平成8年卒の吉原裕之です。北大留学記と併行してこの留学記を書いています。現在4月の末、長い冬も終わり、数日前は完全な夏日でサイクリングを楽しみました。それにしても、この9ヶ月間は休む間のなく走り抜けた感じです。

平成20年8月より、ここ Hospital for Special Surgery (HSS) で臨床留学を開始しました。ここに到達するまでは長い道のりでした。USMLE Step1, Step2CK, Step2CS, Step3 の試験をパスして、更にそこから研修先に必要な推薦状をもらうために北大に1年間留学しました。その頃英語で臨床をおこなうのが全く想像できず、不安でいっぱいでした。ビザは研修開始10日前からの入国が可能だったので、きっちり10日前に入国して、前年度のフェローについて前もって準備をおこないました。なんせ、オーダー、薬も全て英語ですから。。。あまりの緊張感に食欲が全くわきませんでした。

ここ HSS は US News の Orthopaedics 部門で全米 No. 1 の超有名病院で、先日はヤンキースの松井選手も手術を受けましたし、テニスの錦織選手も肘を痛めた時は受診していたようです。整形外科の専門病院で年間の手術件数は25000件ぐらいのようです。脊椎のアテンディング（指導医）もたくさんいて、脊椎の手術件数は年間2300件ぐらいだと思います。Scoliosis & Spine Fellow は6人いて、2ヶ月ごとに別の指導医につきます。今年は特に海外の医学部卒業生が多く、3人がインド出身、2人アメリカ出身、そして私です。私以外は英語を使うことになんの問題もありません。同期フェローの簡単な紹介をします。3人のインド人のうちの Amit と Satya は King Edward Memorial (KEM) Hospital and Seth GS Medical College というインドの名門病院で研修医をおこないました。ここの病院を卒業した研修医のほとんどがアメリカでスタッフになるのを目指してやってきます。彼らの USMLE のスコアはほぼ満点です。優秀でそつがありません。もう一人のインド人の Anthony はインドの南部出身で、インドで整形外科の研修を終えた後、イギリスで整形外科の研修を受けています。彼はクリスチャンですが、どぎつい下ネタが大好きです。勉強になります。Marco は Georgetown University の医学部を卒業して、研修はカナダの McGill でおこないました。アカデミックな道を目指していて、来年は MGH (Massachusetts General Hospital) で Orthopaedic Oncology Fellowship をお

こなう予定です。最後の一人、Alex はテキサス出身で研修は UCLA でおこなっていました。彼は研修医時代にドリンクのビジネスを始めています。Function Drink という飲み物で、ここ NY でも宣伝カーを目にします。彼は何回もテレビに登場していて、経営者の一人でもあるので大金持ちだと思います。私の発音は彼にはなかなか通じません。幸いなことに全員ナイスガイでかなりいい関係を築けていると思います。たまに、愚痴をいうのに食事に行ったりします。

話しはかわり、研修についてですが、最初の1ヶ月半は毎日朝から晩まで手術室でした。最初2週間ぐらいはやり方をみせてもらい、それから徐々に手術をさせてもらい、最終的に片側半分を執刀する感じです。最初についた指導医は、私がうまく英語で会話ができず、多少 Racist な部分もあったのでよく怒鳴られました。ただ、怒鳴られても何をいつているのかわからず、更におどおどしていたと思います。あと、毎朝自分が手術に入った患者を回診します。私の発音が通じない事も多く、とにかく頭を下げて患者が不快にならないように頑張りました。

週末は隔週で回診があり、それでだいたい半日以上つぶれます。オンコールも6週間に1回廻ってきます。これは最初本当に恐怖でした。患者とダイレクトに電話で話すので、普段面と向かっても通じにくい英語が更に通じにくくなります。最初のころは1週間生きた心地がしませんでした。現在は処理の仕方を覚えてなんとかやっています。またプレゼンの準備も大変です。1つのトピックについて1時間話す機会が3回あり、数十分の症例提示は20回以上ありました。空いた土日もその準備でつぶれていきます。おかげでマンハッタンの中心に住みながらほとんど観光に行った事はありません。

側弯サービスでは4ヶ月間勉強しました。そのうちの2ヶ月間は SRS の President である Dr. Boachie につきました。手術は大きい手術が多く、高度側弯を6椎間前方解離、後方固定 T2-pelvis で1日かかりで矯正していました。ほとんどの症例がロングフュージョンで T2-pelvis がしばしばあります。個人的感想としては、縫合が疲れます。片側半分は私がおこなうのですが、回旋が強く、ペディクル径が小さいと何回かうまくいきませんでした(術前CTは撮らないので、、、)、それなりに頭の中で、立体模型を描く事ができるようになったと思います。普通の思春期側弯だったら3時間程度で終わる単純な手術と思えるようになりました。Dr. Boachie は多少の事では驚きません。アッと驚くような事も聞き、訴訟されないの

かと思いましたが、同期フェロー曰く Dr. Boachie は偉くなりすぎて、そういった事を超越していると笑いながら言っていました。

側弯サービスでは週2回、ジャーナルクラブがあり、ついていくのが精一杯でした。指導医が質問しながらおこなうので、答えられないと恥をかきます。4ヶ月間で側弯を含めた小児脊椎は読破しました。

ディクテーションは最も苦勞した事の1つです。患者を診た直後に患者の病歴、所見、治療方針などをレコーダーに向かって録音するのですが、そんな簡単に言葉がでてきません。よって始めは紙に全部書いて読み上げていましたが、明らかに効率が悪く、定型文を幾つか覚えて対処しましたが、それでも他の人の2-3倍の時間がかかっていると思います。

心臓外科の先生方の記事を読んで、アメリカの臨床教育が優れていることに感銘を受けここまでできました。実際研修してみてどうだったかと言われると、HSS に関しては思ったほどでもなかったと言えます。手術ももっとたくさん執刀できると期待していましたが、展開、閉創だけのこともしばしばあります。2年後に向けていろいろな施設に行き話を聞いて、そこで出会った候補者にも話を聞いて、ここ HSS がアメリカの施設の中でも最もハンズオン（手術をたくさんやらせてもらえる）ではない施設の1つであることが判明しました。実際、アメリカ人のフェローもショックを受けており、モチベーションが上がらないとぼやいています。ハンズオンの施設はフェローが全て手術して、途中からは指導医が手術に入らない事もしばしばのようです。アメリカの脊椎外科で最もたくさん優秀な人を育てた Dr. Bohlman のいる Case Western University ではフェローは数か月で独り立ちするような教育をするそうです（私は何回かメールを出しましたがなしのつぶてでした）。ハイプロファイルのところで研修したという経歴よりも実践を望んでいた私にとっては残念な結果に終わりました。それでも2年目をここで続けるのは、応募には時既に遅しであるのと、もう一年いれば更に指導医とコミュニケーションが取れていろいろ学べると思ったからです。それに引っ越しや新しい場所に慣れるのが大変ですから。。。

HSS でのフェロー研修に関しては残念な思いがありますが、ここのレジデント教育を見ているとすばらしいと感じます。小児整形外科をまわる3ヶ月間でほぼ小児脊椎の本を読破してしまい、脊椎グループをローテートするのは、研修医2年目と

4年目の6週間だけですが、展開やスクリュー刺入は一通りおこなってしまいます。彼らは本当にエリートで Undergraduate が Harvard で Medical School が Johns Hopkins といったような経歴の人がほとんどです。アメリカは多様な経歴を踏んで医者になる人が多いと聞きますが、ここのレジデントはストレートで来た人ばかりでした。

いろいろとへえーと思う事がありました。Dr. O`Leary というヨーロッパでも名の通った指導医がいて、ギリシャの富豪に手術に呼ばれたらしいのですが、フェロー、数人の看護婦込みでプライベートジェット機で往復だったらしく、去年のフェローはこの上ない経験だったと言っていたらしいです。また、2年前のチリ出身のフェローは Dr. O`Leary がパバロッティの手術をした際に助手をしていたのですが、自分の親族に自分が手術したように話してしまい、親族の新聞記者がその事をチリの新聞に書いてしまい、パバロッティの関係者がそれを知りだぶ問題になったとの事です。中でも一番驚いたのは、こちらの売れっ子整形外科医の年収です。Best Doctor などに選ばれると高い手技量を保険会社に請求することができるようです。HSS のトップの脊椎外科医の相場は手術1件手技料5000-10000万円です。頸椎の前方固定1椎間が500万円です。インプラント代などは別です。当施設の脊椎外科医の数人は年収10億円以上です。日本の私達の年収など、手術を3件すれば稼げてしまうのです。私は日本でたくさんの優れた脊椎外科医の手術を見てきたので複雑な心境です。ちなみに私の現在の年収は600万円、バカ高いマンハッタンのアパートの家賃を引くと月18万円です。。

3年目の応募が冬場にありました。システムはマッチでお互いにランキングをつけて決まるシステムです。日本の研修医の研修先を決めるのと同じシステムです。40カ所ぐらいに応募して、インタビュー（面接）に呼ばれたのは10カ所ぐらいでした。コネを使わずに応募したら有名どころは呼んでもらえず、行った先は、U Rochester, SUNY, Boston Spine Group, Cleveland Clinic Florida, Spine institute in Santa Monica, Twin Cities Spine Center, Cincinnati Children Hospital でした。呼ばれたうちのいくつかはライセンスの関係で断念せざるを得ませんでした。それぞれ、前日の最終便で移動し、面接が終わり次第帰ってくるというせわしいものでしたが、インタビューを経験するなかで徐々に慣れてきました。また他の候補者と話すことでいろいろな情報を得る事ができました。やはりハンズオンで有名ど

ころはアメリカ人に人気があり、外国医学部出身が入り込むのは難しいです。インタビューの思い出はTwin Cities Spine CenterでDr. Winterと長時間話しができた事で、昔の患者の写真を見せてもらいながら問題を出されました。側弯の大家であるDr. Winterのお話はとても興味深く時間を忘れてしまうほどでした。今現在はなんとかどこか拾ってくれる事を願っているところです。

自分としては3、4年目に更にハンズオンのところで手術の腕を磨き、それから帰国しようと思っています。(もちろん、万が一こちらでスタッフポジションがあれば考えますが、限りなく難しいです。理由はレジデントをこちらで終了しないと専門医がもらえず訴訟になった時に不利になるからです)

なんか人生自体放浪の旅になっており、かつ思ったようにもいっていませんが、これも人生というあきらめと、神風特攻隊のような気持ちで先に進んでいます。とにかく『疲れた』の一言ですが、HSSのナースを含めスタッフの人達が、本当に優しく接してくれ、そのおかげで持ちこたえています。

医局の自分より若い先生方に自分と同じ道を勧める事ができるかと言われたら正直NOです。長期間の精神的なタフさを要求されます。USMLEに合格するまでかなりの時間を犠牲にし、北大では2年目の研修医と同じ扱いになり、ここアメリカでは英語もうまく使えないとみるやレジデントからは有利な立場からの扱いを受けます。そうはいつても、それを覚悟で同じような道を進みたい先生がでてくる事を願っています。ただ、自分より若い先生には『武士道』の精神を持っていさえすれば、もっと楽にいい研修を積んでもらえたらと思います。そういった志があり、可能性を秘めた若い先生がいるのならば、早めに引っぱり上げて、世界に通用する整形外科医が名市大整形外科からでてきたらいいかと、HSSに来てからつとに思うようになりました。

貴重な経験をさせていただき、大塚教授をはじめ、医局の先生方には大変感謝しております。名市大でなければ、こんな事はさせていただけなかったと思っております。今後はすぐに日本に帰ってしまうかもしれないですし、数年先かもしれないですが、帰国した際には灰を拾っていただけたらと思います。よろしく願い申し上げます。

PS 締め切り直前の原稿依頼だったので、思うがままに書いてしまい、内容にまとまりがないと思いますがお許し下さい。

